体から心があふれている、すべての人に

目次

1 体と心 7
2 さびしいから 10
3 魔法 13
4 アナグラム 16
5 絵画 19
6 ゲシュタルト崩壊 23
7 黒柳徹子 26
8 レシピ 29
9 地図 32
10 哲学 35
11 なぞなぞ 38
12 クラゲ 41
13 前略 44
14 レーズンバター 47
15 濁点 50
16 両生類 53
17 因果関係 56
18 エロス 59
19 味の素 62
20 部首 65
21 たましい 69
22 物理 72
23 ふえるワカメ 75
24 無限 78
25 枕 81
26 基準 84
27 神様 87
28 対 90
29 重複 93
30 生まれ変わり 96
31 境界 99
32 シベリア 102
33 鬼籍 105
34 アレの名は 109
35 住所 111
36 いつか 114
37 オノマトペ 117
38 夢 120
39 額縁 123
40 トマトと的 126
41 漢字 129
42 端 132
43 絵のような文字 136
44 オブラート 139
45 絵日記 142
46 質量保存の法則 145
47 デジャヴ 148
48 今 152
49 同音異義／異音同義 155
50 数な言葉 158
51 箱または穴 161
52 まちがい探し 164
53 種 167
54 音楽としての短歌 170
55 水 173
56 匂い 176
57 ストロー 179
58 地名 182
59 丸い三角 185
60 分かる 188
61 言葉にならない 191
62 ものごころ 195
63 〇〇用 200
64 記憶 203
65 似て非なるもの 206
66 不思議四文字 209
67 省略 212
68 丘の上 215
69 ゼリーフライ 218
70 動物 221
71 菌類 224
72 アイムカミング 227
73 比喩 230
74 脚本 234
75 同心円 237
76 G線上のマリア 240
77 さんたんたる鮫鱇 243
78 生け贄 246
79 岡本太郎とムンク 249
80 ベン図 252
81 公園 255
82 中身 258
83 聖書 261
84 幸福 264
あとがき 268

〈本書の楽しみ方〉

テーマに応じた短歌を冒頭にして、その短歌についての解説とも読めるような散文、そして最後にまた短歌、という項目が全部で84ほど収録されています。

最初から読んでも、どこから読んでもかまいません。

気になったページを、まずは開いてみてください。

神様の住所

1 体と心

なぜだろう三十二日梨だけを食べているのに梨にならない

なぜコアラは、ユーカリしか食べないのに、ユーカリにならずにコアラなんだろう。
なぜパンダは、竹しか食べないのに、竹にならずにパンダなんだろう。
「食べなきゃだめ。だって人は、食べたもので出来てるんだから」
朝食の席で母が、どういう流れかそう言う。
（？）
止まった。
（え？　人は、食べたもので出来てるの？　わたしも、食べたもので出来てるの？
いま食べたこのトマトが、わたしの踝（くるぶし）になるの？　このベーコンが、わたしの考えになるの？　このピクルスが、わたしの心になるの？）
心って、物質だったの？という驚き。
心って、物でも形でもなく、変幻自在で誰にも作ることができなくて、だから神聖すぎる領域の核だと信仰していたというのに。

無宗教のわたしの、ほとんど宗教だったのに。
地動説の登場である。
食べたもので、心も出来るのか……。
やさしい心が欲しかった。
そのためには、やさしい心になるものを食べなければならなかった。
そんなスーパーフードとは……
マシュマロだろうか？
カボチャのポタージュだろうか？
ニンジンのタルトだろうか？

きよらかな思考を持ちし牛を食（は）みゆっくり人を愛し始める

2 さびしいから

さびしくて一個は二個になりましたそして細胞は孤独を失う

「さびしいから」は、すべての事象の理由だと思う。

さびしいから、人は胸にブローチを付ける。

さびしいから、人は素麺にかき揚げを、さらにその上に紅しょうがを、さらにその上に青海苔をかけて、クリスマス・イン・サマーしてしまう。

さびしいから、バレンタインにチョコを溶かし、また固めて誰かにあげてしまう。

さびしいから、ワインにゴルゴンゾーラを合わせる。

さびしいから、大江戸線に乗ってしまう。

さびしいから、チロルチョコの杏仁豆腐味を買ってしまう。

さびしいから、車の中にドリームキャッチャーをぶら下げてしまう。

さびしいから、一袋百円のきゅうりをぎゅうぎゅうに詰めて折ってしまう。

さびしいから、七五三でも芸人でもないのに蝶ネクタイを付けてしまう。

「来ちゃった」、と女子が彼の家を突然襲撃するのも、さびしいからである。

ただ怖いのは、「さびしいから」が理由の行為は後戻り不可能のワンウェイ、ということである。

細胞分裂しちゃったあげくの六十兆個の塊の成人を、元に戻すことはできない。

家に毎晩来るようになった彼女の習慣を、元に戻すことはできない。

食べて消化したクリスマス素麺は、もう血になってしまっている。

「さびしいから」はとても怖い。

実は、エゴの丸投げだからだ。

さびしいから神様が独りくしゃみしたそれがビッグバン有の始まり

3 魔法

「あぶらかだぶら、あぶらかだぶら」と唱えると脳内に見える中東の油田

マジックと魔法は違う。
イメージは似ているが、別物である。
マジックはテクニックで、必ずからくりがある。
一方、魔法は念力、あるいは「信じられないくらいの集中力」のことである。
ホスト・ホステスの口説きは、マジックである。
一方、本気の告白は魔法である。
「火事場の馬鹿力」という言葉がある。
「母ちゃん!!　一体どうしちゃったんだよ!?　なんで冷蔵庫と洗濯機を同時に背負えるんだよ!!」
それは母ちゃんが、火事場の馬鹿力という魔法を使ったからである。
車のハンドルの「あそび」のように、脳や体にも余力がある。
通常、脳も体もそのマックス能力の三割しか使われていないと聞いたことがある。

霊能者やオリンピック選手は、脳や体の八割くらいは使っているのかもしれない。
余力とは、いざというときのための非常食のようなものだ。
その非常事態に備えて、普段は安全運転、四十キロの法定速度で走っている。
しかし、いざとなったら鈴鹿サーキットでもないのに普通車で二百キロ超えである。
ただし「それ」をしたら、車も運転手も終わる。
問題は、いつが「それ」なのかということだ。
魔法は一人につき、一生に一回しか使えない。
「脳を百パーセント使うと神になってしまう」、と言う人もいる。

目を閉じる脳内が宇宙全体と一致して（たぶんわたし死んでる）

4 アナグラム

おかえりなさい、おさないえりか。おくりものはもりのおくです。

アナグラムの恐ろしいのは、「同じ音を含むものは同じ原素を含む。よって同じ音を含むものは同じ意味を持つ」というところである。

冒頭の歌で、「おかえりなさい」と「おさないえりか」、「おくりもの」と「もりのおく」はアナグラムであるが、この論でゆくと、「おかえりなさい」と「おさないえりか」、「おくりもの」と「もりのおく」は同じ原素を含んでいる。

有名な人名アナグラムに、ナイチンゲールがある。

あの、戦場の白衣の天使の本名のスペルは Florence Nightingale だが、これをバラして組み直すと Flit on, cheering angel!（あちこち飛び回れ、激励の天使！）となり、なんとこれだけでナイチンゲールの人生を語り尽くしている。

今は監督業で精力的に活動している元西部劇俳優のクリント・イーストウッド。彼の Clint Eastwood のスペルを解体して再編集すると、なんと old west action（古き西部のアクション）。もはやこれは、偶然の一致ではない……。

歌手のマドンナの本名は Madonna Louise Ciccone（マドンナ・ルイーズ・チッコーネ）だが、これも散らして集め直すと one cool dance musician（一人のかっこいいダンスミュージシャン）と、これまたマドンナそのもの、になってしまう。

ザ・ハリウッドスターのトム・クルーズ。Tom Cruise を再構築すると So I'm cuter!（だから、僕のほうがかわいいんだってば！）と、これもトムっぽくなる……。

これらの例は、「同じ音を含むものは同じ原素を含む。よって同じ音を含むものは同じ意味を持つ」ことの証明ではないだろうか。「listen」（聴く）と「silent」（静かな）、「dog」（犬）と「god」（神）、「未来」と「ミライ」もアナグラムである。

それから、日本人の心「いろは歌」は、「五十音」の巨大アナグラムである。

仕方ない硬い梨だからと食べずに眠れない群れないね羊

「しかたない」と「かたいなし」、「ねむれない」と「むれないね」がアナグラム

5 絵画

母曰く「遠くの山は紫で、近くの山は緑色で描く」

冒頭の歌の「　」内の母の発言は、いわゆる「空気遠近法」のことなのだが、一般セオリーが「遠くほど青みがける」に対して、母セオリーは「遠くほど赤みも入った紫めかす」である。

母の発言どおりに山を描いてゆくと、なぜか「赤とんぼ」の出だしの夕やけ小やけムード漂う風景となる。

小学生時代の夏休みは毎年家族でキャンプに行った。

現地に着くと、運転で徹夜だったはずの父が、組み立てたばかりのテントで寝ようとするわたしを呼ぶ。

「いい天気だから絵を描け」

行くしかない。

現場には母もスタンバっていて、

「遠くの山は紫で、近くの山は緑色で」

と呪文のように言う。

描くしかない。

しかし、ちょうど筆が乗ってきたところで、

「だめだ、人間が描けてない」

と父が言う。

当たり前だ。わたしは山を描いていたのだから。

「絵っていうのは、人を生き生きと描かなくてはならない」

孔子のごとく、父は言う。

父はわたしを、キャンプ場の共同炊事場に連れて行った。

そこでは七、八人が米を研いだり野菜を洗ったりしている。

「あれを描け、クレヨンで描け」

父は言った。

その絵は、夏休み明けに市長賞を取った。
わたしは中学で美術部に入り、文化祭に、写真で見たセーヌ川沿いのノートルダム大聖堂を油絵の具で描いて出した。
それを見た父はまた、
「だめだ、人間が描けてない」
と言った。
ブレない父を、わたしは信頼している。

点描絵のスーラの筆致ちかづくとひとつ、ひとつが未知の昆虫

6 ゲシュタルト崩壊

回回回回回と書くじわじわとラーメン食べたい中華鉢模様

ゲシュタルト崩壊とは、たとえば「あ」という字を見続けていて、ある瞬間に（「あ」ってこんな字だったっけ……）と感じるような現象である。
文字や形の持つ意味がテトリスのごとく崩壊消滅してゆく。
風邪もゲシュタルト崩壊のひとつである。
日常や習慣が崩壊してゆく。
体の、特に内部の確かさが崩壊してゆく。
どこからどこまでが自分で、どこからが外部なのか分からなくなる。
免疫とは、崩壊を防ぐ自己統一感なのだ。
思春期は橋を渡って別の意味世界へ行く時期だから、崩壊が頻出する。
ええ!?　お父さんが男？
で、お母さんが女で、二人は元恋人同士!?
家庭ゲシュタルト崩壊である。

ひとつの恋愛が終わるのも、妄想ゲシュタルト崩壊である。
あんなに愛おしかった世界一大事なぬいぐるみが、薄汚れたただの布の塊へと降格してゆく。
季節の変わり目にも、この崩壊が起きている。
公害なほどうるさかった迷惑ヘルツな蝉時雨（せみしぐれ）が、懐かしい夏の思い出になる。
世界がゲシュタルト崩壊すると、わたしは眠る。
夢の中は常にあたたかな湖だから、この現象を免れる。
ゲシュタルト崩壊は、液体には起こらないのだ。

全身の鍵がひとつずつ開けられてみずたまりとなり夜に落ちてる

7 黒柳徹子

徹子の部屋の窓から見えてたえいえんみたいな二個目の太陽

気づいたときには、黒柳徹子は黒柳徹子であった。

「パンダ博士」を名乗ったり「トットちゃん」と呼ばれたりしても、それは束の間の模様替えのようなもので、黒柳徹子は「黒柳徹子」以外では形容できない黒柳徹子である。

『徹子の部屋』を見ていると、徹子の部屋の住人になってしまう。

番組は平日の昼に放送されていたから、夏休みには毎日住人だった。

当時の自分の部屋のことはすっかり忘れているが、徹子の部屋の中は番組をまったく見なくなった今でもよく覚えている。

わたしは、徹子の部屋の壁に飾られた絵に目が釘づけだった。

(「あの人」は一体、誰なんだろう……?)

「あの人」とは、カシニョールの絵に描かれた、つば広の白い帽子をかぶった大人の妖精みたいな女の人のことである。

その人の後ろには、白樺が何本も何本も奥のほうまで立っていて……。
番組の時間が終わると、毎回せつない。
「徹子の部屋」とは、みんなの体のランゲルハンス島のような、現代人のオアシスであり、蜃気楼(しんきろう)である。
実は黒柳徹子は「徹子の部屋」に住んではいないし、あの部屋を照らしている光も、現実の太陽ではない。
けれど、夢の中の白樺林を通り抜け、つる薔薇(ばら)で縁取られた扉を開けると……。
えいえんの黒柳徹子が、つば広の白い帽子の大人の妖精とおしゃべりを続けている。
窓の外には、偽物みたいな太陽。

こんにちは黒柳徹子こんにちはえいえんの続きごっこしませう

8 レシピ

耳たぶのやわらかさになるまでこねてキツネ色になるまで焼いて食べて

レシピとは、エンドレスの丁寧な命令文である。
だからなのか、レシピを読み続けていると、神経がどこかイラついてくる。
命令とは、動詞でするものである。
だから、動詞を使わずにレシピは作れない。
ためしに、オムレツのレシピを動詞なしで作ってみよう。
〈四人分〉 卵四個を……。フライパンに卵液を……。
オムレツは永遠に出来上がらない。
冒頭の短歌には「なる」「こね（て）」「なる」「焼い（て）」「食べ（て）」と、動詞が五つも出てくる。
三十一文字のうちに、である。
短歌の作り方の定説として、「動詞は少ないほうがいい」というものがある。

明け方の新聞配達のバイクのエンジン音の近きが遠く

右の即席の短歌には動詞がないが、バイクは動いた。
しかしこれは、バイクの動きを表す動詞「走る」の省略が暗黙に了解されるためだ。

ゆっくりとだんだんとぽっかりとはやくひたひたとぞくぞくと神妙に

今度は副詞と形容詞のみで作ってみたが、状態と形容だけでは何も見えない。
やはり、名詞と動詞は文の顔と体で、その二つなしでは正体不明になってしまう。
冒頭のレシピの歌は、性愛の歌にも読める。
性愛とは、シュガーコーティングした命令だ。

レシピには〈巻き込みなさい何もかもこの世は束の間の春巻きだから〉

9 地図

地図上の果樹園の記号その中に世界の電源ひとつ混じりぬ

グーグルアース上の「無人島」に人が映っていて、そこは有人島であることが分かったという。

地図とは、暫定的な共有イメージである。

よく見慣れた日本地図が上下左右逆になっていて、北海道が本州の下に集合写真の欠席者扱いのごとく配置されている「地図」を見たことがあるが、酔った。

見慣れているメルカトル図法は緯度と経度が垂直に交わっている。

航海のための地図だからなのだが、結果、北極と南極に近くなるほど面積が水増しされる。

グリーンランドは「あれほど」広くはない。

「(風のない)真空に旗が揺れている」ことから、人類初の月面着陸はアメリカによる捏造映像ではないかという疑いが、あったらしい。

本当は、地図に示された地上など、存在しないのかもしれない。

ただの人類の脳内共有イメージ、なのかもしれない。
本当は、地球も太陽系も、存在するのはイメージとそのイメージに命名された地名だけで……。
地図上の〈果樹園〉の記号⏣の中にひとつ、世界の〈電源〉記号⏻が混じっている。
地図上での見た目は、ほぼ同一。
そのひとつを探し当て、そのひとつが指し示す「実際の地上」に立って「そこ」を押すと……
世界またはわたしの電源がＯＦＦになるのかもしれない。

等高線をたどって同心円迷路バウムクーヘンの一部になる

10 哲学

〈体積がこの世と等しいものが神〉夢の中の本のあとがき

哲学は、「時間とは？」「空間とは？」「わたしとは？」を問う学問である。
この世とは、「時間」と「空間」と「わたし」を内包したものである。
だから哲学は、「この世とは何？」と問うている。
自分を客観視することが、哲学の第一歩なのだと思う。
小学校に上がる前、電車の車窓から、遠くの、山裾の家々が見えた。
「その中」を見たときだ。
そこには「動く人」がいた。わたしの人形の家の中の、人形ではなく。
その瞬間わたしは、「世界はわたしのものではない」と気づいた。
この世とは、煮詰めてゆくと「我思う、ゆえに我あり」であり、拡大してゆくと「宇宙の果てはない、完璧な絶望が存在しないようにね」なのらしく、実際一個体の我であるわたしもそう感じる。というか、そう感じるほかない。
そう感じるほかないというのは、宇宙の類似品である我は、自分の眼球で自分の眼

球を見ることができないように、宇宙の客観が拒絶されているからだ。
この拒絶が、イコール神の手触りなのだ。
この拒絶を「禁忌」や「タブー」と言い換えて解釈してもよい。
一卵性双生児のように外見がそっくりな親子が、「死ね！」「お前が死ね！」と罵倒し合っている現場を目撃したことがあるが、宇宙と我もこの親子のような関係である。
相手の死は、つまりイコール自分の死だ。
我々も、共存（共依存）関係にある宇宙を殺せない。
宇宙とは、それぞれのわたしだ。
だから宇宙は、実は生きている人の脳の数だけ存在している。
宇宙とは、点在する濃密である。

NとN、SとSのくっつかなさをこの世の極みの手応えと思う